

第3回北陸圏広域地方計画有識者懇談会 議事録

日時：令和5年1月27日(金) 13:15～16:00

場所：石川県文教会館 4階 大会議室

1. 開会

2. 挨拶

[北陸地方整備局長]

- ・ 本日は大変お忙しい中、そして厳しい寒波や大雪の中、ご参加いただき感謝申し上げます。
- ・ さて、第1回の有識者懇談会は8月23日に開催したが、委員の皆様からは北陸圏の有する課題、その対応に当たっての着眼点や目指すべき方向性について参考となる数多くの意見をいただいた。そして、その議論をさらに深めるため、「北陸圏からの若者の流出」、「デジタルの活用」という2つのテーマを設定し、書面開催の第2回有識者懇談会で新たに分科会を設置することを承認頂いたうえで、11月から12月にかけてそれぞれ2回の分科会を開催した。これらについても熱心なご議論をいただき、御礼申し上げます。
- ・ 今回は第1回懇談会と分科会でいただいたご意見を踏まえて作成した次期広域地方計画の骨子素案について皆様からご意見を賜りたいと思っている。
- ・ 新型コロナウイルスの対応については少し方向性が見えてきているが、国際情勢等を含めると見通しが見えない状況である。
- ・ いずれにしても北陸圏の社会経済活動が活気づき、将来の希望や向かうべき方向性が見いだせるような地域づくりを計画してまいりたい。
- ・ 委員の皆様からは忌憚のないご意見を賜りますようお願い申し上げます、開会の挨拶とさせていただきます。

3. 議事

[座長]

- ・ 北陸は雪に強いと言いながらも今回の寒波はなかなか大変であった。今週火曜日に一気に降り始め、大学の方も急遽4限目、5限目は休講になり、早めに帰るよという連絡があった。北陸道が通行止めになり、県境も通行止めになった。その影響が随分渋滞していて帰宅には倍の時間が掛かるなど大変だった。過去にも何度も大雪は経験しているが、一国民としても何とかならないものかと思う。非常に難しいというのが現実だと思う。これまでも防災的な観点については被災もあり、対策に努力をしていると思うが、それでもこういう状況である。時代は変わっても防災については永遠のテーマなのではないかと思っている。
- ・ 北陸圏の広域地方計画を今後どうあるべきなのかということ考えた中で、今回2つの分科会を設けてそれぞれ貴重なご意見をいただいた。その内容についてはこの後の骨子の素案の中でもまとめていただくことになっている。分科会はそれぞれ2回開催し、堀田副座長、野嶋副座長に取りまとめていただいた。随分良い提案になったのではないかと考えている。

- ・ 限られた時間ではあるが、骨子素案について議論、意見交換をしたいと思う。よろしくお願ひ申し上げる。

(1) 第1回有識者懇談会における主な意見

[事務局]

- ・ 資料1にて「第1回有識者懇談会における委員からの意見」を紹介する。
- ・ 第1回懇談会では、事務局から北陸圏の「人口動態」「暮らし」「防災」「農林水産業」「資源の有効活用とカーボンニュートラル」「ものづくりをはじめとした地域産業の振興」「北陸圏の魅力向上」といった7つの分野から「現状と課題」を示し、これに対して各委員それぞれの専門分野や知見等から参考となる数多くの意見を伺った。
- ・ この資料は、いただいた意見を課題毎に分類したものである。ここでは、ひとつひとつの意見は読み上げないが、後ほど紹介する北陸圏の強み・弱み等をSWOT分析として整理した際や、新たな計画骨子検討にあたり重要な観点として反映させていただいている。

(2) 分科会からの報告・提言

①分科会設置の趣旨等

[事務局]

- ・ 資料2により二つの分科会の設置主旨等を紹介する。
- ・ はじめに「若者の圏外流出」分科会である。
- ・ 第1回懇談会では、人口の社会減、特に「若者の圏外流出」「女性の流出」について複数の委員から意見が挙げられた。
- ・ この中で、これまで、持ち家比率や共働き率、三世帯同居率の高さ、地域コミュニティの強さなどは、北陸圏の「強み」と認識していたところだが、これらは若者に対しては寛容さに欠く要因にもなり得るとし、多様な価値観が受け入れられることや、男女共同参画の実現が若者の流出防止に重要であるといった意見が出た。
- ・ 具体的な対応策として、リカレント教育やIT企業の参入、人材の流動性を高めることなどが提案されたが、広域地方計画に反映させるためには、さらに幅広の意見、掘り下げた議論が必要と判断し、分科会を設置することとした。
- ・ 参加いただいた委員は記載のとおりである。
- ・ 次に、「デジタルの活用」分科会については、昨年7月に公表された新たな全国計画の中間取りまとめにおいて、デジタルを徹底活用して生活者・事業者の利便を最適化する「地域生活圏」が提案されている。また、デジタル田園都市国家構想においても「デジタルは地方の社会課題を解決するための鍵」としてDXの推進が求められている。
- ・ そこで、北陸圏では諸課題の解決に向けてどのようなデジタル技術をどのように活用するべきかなどについて意見を伺い、新たな広域地方計画に反映させるものとした。
- ・ また、リアルの対応とデジタルの活用において、重要視すべき観点等についても合わせて意見を伺うこととしたところである。
- ・ 参加いただいた委員は記載のとおりである。

- ・ 分科会の設置主旨等は以上である。

②各分科会からの提言

「デジタルの活用」分科会

[分科会座長]

- ・ 提言は「北陸圏におけるDX推進にあたっての基本的な考え方、取組のスタンス」ということである。
- ・ まず、はじめに北陸圏で急速に進む人口減少・人口流出と、地域の利便性低下、地域経済の衰退等の悪循環に対応するため、あらゆるデジタル技術を徹底活用することにより、リアル空間における生活の質の維持・向上を図ることが重要である。
- ・ これは頭出しのようなデジタルの必要性を訴えたものである。リアル空間の生活の向上を推進していくためにデジタルを活用していくという文言である。
- ・ 2つ目は、デジタルの活用により、公共交通などの様々な地域課題の解決や、農林水産業・製造業・サービス業それぞれの活性化、地域振興を図るためには、産・官・学・地域住民等、あらゆる関係者が連携して取り組む事が重要である。また、北陸圏における地域の関連産業・企業間の連携強化を行い、地域経済循環を促進する。
- ・ これは北陸圏域の中で経済のネットワークをつくって地域経済循環を進めていこうという提言である。
- ・ 3つ目は地域の自然環境の保全や歴史文化と調和したまちづくりに留意しつつ、テレワークの普及やデジタルを活用した情報発信等により、国内屈指の暮らしやすさや自然、食文化等に恵まれた北陸圏の魅力を最大限活かし、地方移住や二地域居住の促進、関係人口の拡大、広域観光の展開、特産品のPR等の取り組みの推進が期待される。
- ・ これは北陸の魅力を最大限活かし北陸の魅力づくりを行っていこうというもので、それについてデジタルを活用して行っていくという趣旨のものである。
- ・ 続いて、カーボンニュートラル関係だが、デジタルの活用によってカーボンニュートラルの実現や資源の地域循環の取り組み、並びにエネルギーマネジメントの取り組みが重要である。
- ・ これはカーボンニュートラルは必要であるが、北陸圏では自然の資源がたくさんあり、そうした地域の自然循環と関係しつつカーボンニュートラルの施策を行っていくことが必要だと提言している。
- ・ 5つ目は、防災面においてもデジタルを活用し、除雪作業の効率化や省力化を図るとともに、北陸圏で懸念される自然災害に対して適時・的確な防災情報の提供や被害を最小化するための被害情報の把握・共有等を行い、地域の安全・安心を確保する。また、太平洋側の巨大災害に対し、日本海側の中核に位置する北陸圏が支援を行う。
- ・ これは先ほど座長もおっしゃったように雪害というのが北陸圏の特徴的な災害かもしれないが、すべてのそういった災害に対してデジタルも活用しながら事前防災を徹底していくということである。また一方で日本海側は太平洋側の巨大災害に対して第2国土軸というような言い方もできる。よって、国のリダンダンシーを高めるという意味でも、日本海側にある北陸圏による支援は必要なのではないかと提言している。
- ・ 最後に、高齢者等への配慮、デジタル活用のメリットを受けられる環境の整備や支援が必要である。また、デジタル活用の推進主体に対する支援や環境整備、人材の育成等が課題と考えられる。

- ・まず、デジタル活用において高齢者が多い過疎化地域はそうしたものを使いこなすようなインフラがなかなか整っていない。そうしたインフラ整備も含めて人的な支援が必要である。特にデジタル活用を推進していく主体に対する支援や人材の育成等が必要であるということを提言している。

「若者の圏外流出」分科会

[事務局（代読）]

- ・ 分科会は 2 回開催し、特に 2 回目は直接若者の声を聴きたいということで、高校生、大学生 2 名ずつからそれぞれ思いを語ってもらい、ビデオ録画したものを分科会の場で流した。
- ・ まず北陸圏が目指すべき方向で議論になった点を申し上げる。
- ・ 若者が一旦圏外に出て暮らすことは、北陸圏の長所、短所を知る機会にもなるので、肯定的に捉えることも必要である。
- ・ 2 点目として、若者が北陸圏で暮らしたいと思えるような寛容性や幸福度が感じられる地域社会を構築していくことが必要。
- ・ 3 点目に、若者が北陸圏に親しみを感じてもらうためには、若者だけでなく、そこに暮らす中高年世代の意識を変えていくことが必要。
- ・ 4 点目に、北陸圏をもっと知るため、さまざまな世代が、住民主体で行うまちづくり活動などの地域活動に参加すること、シティズンシップ教育を啓発することが必要。
- ・ 最後に、北陸圏の就業・就農を考える若者に対して支えていく仕組みを構築することや北陸圏の企業の情報を発信していくこととともに、企業の圏外からの誘致や、新産業の育成に取り組む事が必要。
- ・ 以上が目指すべき方向として議論になった。次に、分科会の提言としては 4 ページ目に書かれている 4 点である。
- ・ 1 点目に、北陸地域に関心を持ってもらうため、北陸圏内外の若者に対し、北陸地域を知る機会、学ぶ機会を増やすこと。
- ・ 2 点目に、北陸圏で就業・就農を検討している若者を支援する中間支援組織を育成することの重要性を発信していくこと。
- ・ 3 点目に、U I J ターン希望者を含めた全世代に対して北陸圏に存在している企業の魅力を積極的に情報発信していくことや、企業の誘致・新産業の育成に取り組むこと。
- ・ 4 点目に、中高年世代が様々な世代との交流を体験できるリカレント教育の機会を増やすこと。そこにおいては参加者が様々な立場を体験できるカリキュラムを用意することが重要。以上の 4 点である。

[分科会座長]

- ・ 分科会の提言をまとめるにあたり、高校生と大学生 2 名ずつオンラインでヒアリングをさせていただいたものも含めて意見をまとめた。我々分科会のメンバーだけではなく、若い世代の方々からの意見も聴取したことは非常に良い成果につながったのではないかと個人的に思っている。

[座長]

- ・ 私もそれぞれの分科会を視聴させていただいた。特に高校生の意見は生の意見なので、非常に参考になったのではないかと感じた。
- ・ それぞれ 2 つの分科会からとりまとめの内容と提言内容について説明をいただいた。各委員から意

見や質問があれば挙手をお願いする。

[委員]

- ・ 2つの分科会から出た意見は共通しているところもある。それを確認し、さらに議論を深めていくとよいのではないか。

[委員]

- ・ 若者の圏外流出分科会の提言で「就業・就農を考える若者に対して」とあるが、これだけを見るとミスリーディングになる可能性が懸念される。その時の話として起業の話が少し入っていたと思うが、若者に戻ってきてもらうのは必ずしも起業する方々ばかりではない。また、農業をする方に限っているわけでもない。ここで「就業・就農」と別にするとう農業を重視しているというように捉えられてしまう可能性があるのではないだろうか。もし入れるのであれば、「起業」という言葉を入れる方が「中間支援組織に入っただいて若者の起業を支援する」ということでもう少し具体的になるのではないだろうか。就農だけを入れるのは少し違う部分もあるかと個人的には感じた。

[委員]

- ・ 若者の圏外流出で学生の意見を聞かれたということは素晴らしいと思った。
- ・ この分科会で定義されている若者とは何歳ぐらいの方なのか伺いたい。どのぐらいの年齢層の方を若者と言って議論していたのだろうか。

[委員]

- ・ まず今回は高校生と大学生にヒアリングをした。高校生から圏内外の大学に進学するところの世代がまず1つの世代。そして、4年制大学を卒業した後、圏外の大学に出て北陸に戻って就職するというのが1つ。そのあと就職されてもU I Jターンで北陸に戻って来て欲しいということがあるので、なかなか表現は難しいが20代、30代くらいがターゲットになるのであろうと我々はディスカッションしている。もちろんもっと上の世代の方々も可能性はある。ここからここまでという表現はないが、10代後半から20代くらいまでをイメージして議論をしていた。

[委員]

- ・ 今回年齢を伺ったのは、他の国の職業訓練とか移住施策を見てみると、オーストラリアだとデジタル化の職業訓練を受けられるビザが出るのは35歳までで、35歳以降になるとどんどんビザが取りにくくなったり、優先的な学び直しの機会が取りにくいということがある。これから産業を盛り上げてくれる若い方に来てほしいというUターンを目的にするのならば年齢を定義して戦略を持つということも大事ではないかと思った。

[委員]

- ・ 若者の分科会は、若者の流出がテーマだったが、特に若者の中でも女性の流出率が高いという現状があるにもかかわらず、その論点を十分に話しきれなかった。その点についてジェンダー、男女共同参画、寛容性の問題などいろいろある。今回提言としてこのように整理していただいたので、また計画骨子の素案の方でそのような論点も出させていただければ有難い。

[委員]

- ・ 第一次産業においては林業や漁業もある。「就農」とするとどうしても農業にだけ目を向けているように思える。

[委員]

- ・ 若者の圏外流出の話をしたときに皆で意見が共通したのは「囲い込みをしてはいけない」という話をされたように思う。圏外に出ていかないようにする施策ではなく、圏外に出ていってもまた戻ってくるような施策が大事だというのは圏外流出の分科会で皆が共通した意見だったと思っている。そこで、若者という範疇を超えて、地元に対して愛着を持ち、将来は地元のために貢献したいと思う人たちをどう育てるかということが重要だと今回の分科会で感じた。

(3) 新たな北陸圏広域地方計画の骨子[素案]について

[事務局]

- ・ 資料3-①、次期計画の骨子案策定にあたっての考え方について説明する。
- ・ 一つ目のスライドは現行計画に対しての見直しの方針を表したものである。現行計画は平成28年に計画期間を10年として策定したものである。
- ・ これに対して、社会情勢の変化や、国の新たな計画・施策を踏まえ、さらには現状の課題、第一回懇談会や分科会でいただいたご意見も踏まえたうえで、SWOT分析により北陸圏の強み、弱み、機会、脅威を整理した。
- ・ そして、強みを伸ばす機会とした取り組みや、弱みを克服する取り組みなどから、新たな方針等を検討するものとした。
- ・ 2ページ目はSWOT分析として、左上から強み、弱み、機会、脅威、として整理したものである。
- ・ 強みについては、子育て環境が充実し、学力が高い。居住環境に恵まれていること。豊かな自然、水、歴史、伝統文化、食文化があること。特徴あるモノづくり産業、最先端技術を活かした世界ニッチトップ企業が集積していること、などが挙げられる。
- ・ 一方、弱みについては、人口減少・少子高齢化が進み、若者が流出していること。その原因とも言えるのかもしれないが、人の移動が少なく、価値観が固定されやすい。若者や女性にとって魅力的な仕事、働く場所が少ないことなどがある。
- ・ 機会としては、デジタル技術の進展、北陸新幹線の敦賀延伸のほか、カーボンニュートラルやSDGsといった社会的要請がある。
- ・ 脅威は、自然災害の激甚化、頻発化、気候危機などが挙げられる。
- ・ 3ページ目は、「強みと機会を掛け合わせてさらに伸ばす」あるいは「弱みを克服するチャンスとする」といった概念を表したものである。
- ・ 4ページから7ページ目までは分科会からの提言を再掲したものである。
- ・ 8ページ目からは新たな計画の将来像の提案となる。
- ・ 現行計画では、「暮らしやすさに磨きをかけ、さらに輝く新・北陸」と「三大都市圏に近接する特性を活かし、日本海太平洋2面活用型国土形成をけん引する新・北陸」の2つの将来像を設定していた。
- ・ これに対して、現状の課題等を踏まえ、この先に北陸圏が目指す概括的な方向性を将来像として示す

ものとするが、下の青い囲みに記載したとおり、北陸圏でもある程度の社会情勢の変化は見られてはいるが、現行計画の目指した方向性を別の方向に転換させることまでの大きな変化はないものとし、現行計画の基本的な理念は踏襲するをしたい。

- そして、次期計画の将来像については、「住み心地・居心地よく、多彩な魅力を活かして躍動する北陸」と提案させていただく。
- 9 ページ目、提案の将来像への思いをお示ししている。
- 課題等を踏まえた中で、これまで「暮らしやすさ」が評価されてきた北陸圏において、デジタルの活用などにより、居所・世代・性別・出身地等を問わず、誰もが住み心地、居心地がよいと思える北陸の姿、そして社会経済・人々がいきいきと活動する、ここを躍動すると表現したが、そういった北陸の姿を将来像として設定するものである。
- 将来像の具体的な状態としては、「誰もが、多様な価値観、ライフスタイル、ライフステージに応じた暮らし方ができる。」「安全・安心な暮らしが確保されている。」「就きたい仕事があり、経済的にもゆとりが持てる。」「自然と人々の暮らしが調和した生活圏が形成されること。」など。
- 産業面では「技術革新やニーズの先取りにより、北陸で生産する製造品や技術力の評価が高まる。」ことや「多くの観光客が訪れる。」といった状態を目指したいという思いである。
- この中で、どれか「抜きん出て」ということではなくても、このような状態がそろふことで、一人一人が真に幸福感を実感することができ、それは他の圏域にはない魅力となり得るものと期待する。
- 10 ページ目は、将来像を実現するための目標の設定である。
- 現行計画で4つの目標が設定されており、「暮らし」「産業」、それらを支える「物流・交通等のネットワーク強化」、観光も含めた「交流・関係人口の創出」としており、サブタイトルは若干見直したもの、目標については現行計画をそのまま踏襲したい。
- 11 ページ目からは4つの目標の下にぶら下がる施策の設定である。左側、現行計画では「戦略」としていたところだが、これを右に示すように「施策」と言い換えることとしたい。
- 目標1「個性ある北陸圏の創生」という目標にはこれまで左側に示す5つの戦略が設定されていたが、これに対して、真ん中に「SWOT 分析による見直しのポイント」を示している。例えば、「子育て環境が充実している」という強みに対して、テレワークの普及を図ることで子育て世代の暮らしやすさ、働きやすさのさらなる向上が期待できるのではないかと。
- あるいは、若者の圏外流出という弱みに対してデジタルを活用して若者にとって魅力的な仕事や企業、モノや情報の入手を可能とすることによって、若者のニーズの実現が期待できるのではないかと。
- そして、これまで頂いた意見も踏まえて施策としては「多様な価値観やライフスタイルに応じた暮らし方、働き方のできる生活環境、雇用環境の拡充・支援」と設定したいと考えた。
- 2つ目は従来、「多様性と集客性のある都市サービス拠点の云々」とあるが、趣旨の変更はなく、端的に「デジタルを活用した地域生活圏の形成」としたい。
- 12 ページ目は安全安心な地域づくりについてはさらなる強化を必要とするとして、流域治水の取り組みのキーワードとされている「あらゆる関係者が連携・協働し」というフレーズを盛り込みたい。
- その下は、「地域循環共生圏の形成、脱炭素地域づくり」と改めるものである。
- 13 ページ目では、「競争力のある産業の育成」という目標に対して、2つ目についてはデジタル分科会からの提言も踏まえ、「産官学及び企業間の連携とデジタル技術の活用によるものづくり産業の競争力強化」と見直したい。

- ・ 14 ページ目は、「物流・交通ネットワークの充実」である。二つの戦略についてネットワークの強化を集約するものとし、主旨については大きな変更はない。
- ・ 15 ページ目は、「交流・関係人口の創出」という目標について、いずれも「豊かな自然、歴史文化等の観光資源」という強みに対して、デジタルによる情報発信・テレワーク、あるいは北陸新幹線延伸という機会を活かして拡大を図るものとする。主旨については大きな変更はない。
- ・ 16 ページ目は、計画の体系を示した。
- ・ 資料 3-②は、検討方針を踏まえて作成した次期計画の骨子素案である。
- ・ 1 ページから 7 ページ目までが目次構成となる。第一章は「現状と課題」、第二章は「将来像」、第三章は「目標・施策」となる。
- ・ それぞれの項目の菱形マークのサブタイトルに沿って、内容を記載していくこととなる。
- ・ 資料の 8 枚目以降がいわゆる「骨子」とするもので、四角囲みの中にそれぞれの項目のキーワードとなる指標や出来事、重要視すべき観点や取り組み等を記載している。
- ・ 資料 3-③は、現行計画の骨子に対しての変更箇所を朱書きでお示ししたものである。
- ・ 参考資料 1 から 3 は、第 1 回懇談会や分科会で頂いた意見について、骨子のタイトルやキーワードとしてどのように対応しているか示したものである。
- ・ いくつかの意見を括ってタイトルやキーワードを設定しているが、計画本文の文章を記述する際には個々の意見も参考としたい。

[委員]

- ・ 分科会の最初にタイムパフォーマンスの話をしたが、若者と中高年世代の意識が違うということが、資料 3-① 4 ページの 3 つ目、「若者だけでなくそこに暮らす中高年世代の意識を変えていくことが必要」に反映されているのかと思っているのだが、若者の意識との乖離ということはあまり記載がなかったと感じている。見落としがあるかもしれないので、事務局の方で記載があるところを教えてください。
- ・ 補足で以前タイムパフォーマンスということ意見を意見したのは、今までの慣習のままで人と会うことを重視するのではなく、大切な人と会う時間を重要視してそこに時間を使いたいと言う気持ちが大事だということだ。ただ会えば良い、というわけではなく、そこでオンラインをうまく活用しようという趣旨の話をした。
- ・ 対面ということに対しての意識が世代によって違う場合があるので、そこで乖離が起きている。そのために上の世代がある程度意識を変えていく必要がある、ということが 4 ページの 3 つには十分反映されていないと思う。

[事務局]

- ・ 資料 3-②の 11 ページ目、後ろの四角囲みがある方に「新たな目標・施策」の章のところで、キーワードとして「北陸圏での多様な暮らし方・働き方の提案ダイバーシティへの対応」という表題をつけている。四角囲みの中に「柔軟な働き方や多様な価値観に対応するため、企業における業種、職種の多様化推進とダイバーシティへの寛容な社会の形成」と表現している。ダイバーシティというと国籍や人種ということもあるが世代が違うということも、若者であったり、年配の人であったり、いろいろな人への寛容な社会への形成という中に委員の意見を踏まえて反映させている。

[委員]

- もう少し踏み込んでいただいた方がいいのではないだろうか。ダイバーシティという言葉だけではなかなか通じない部分もある。こうやって会議をオンラインで参加できる状況になってきて、それに慣れている人とそうではない人、それから、オンラインだからこそ、対面だからこそできることがある。そういったその時その時の多様なツールを使っていくことで対面の時間というのを有効に使おうという、そういう意識であるということがここにはない。ダイバーシティとか多様な価値観だけでは伝わらないと感じる。それは結局デジタルの徹底利用につながると思う。よって、デジタルを活用するということは対面を重視しないわけではない。むしろ対面の時間を重視するからこそデジタルを徹底的に活用するんだということをもう少しわかりやすく入れた方が良いと感じた。

[委員]

- 資料の3-①の13ページ2番目の「競争力ある産業の育成」について、先ほどの若者の圏外流出分科会で出てきていた意見で若者たちに知ってもらうことが重要であるということが何個も提言に載っていて、それを謳っているのがもしこの13ページの例えば施策の「(1) デジタル活用による圏域の食料供給力と地域ブランド力のさらなる強化」、「(2) 産官学及び企業間の連携とデジタル技術の活用によるものづくり産業の競争力強化」となるのならば、これはどちらもデジタルを使ってのみ若者に発信するということになってしまうので、すべてオンデマンド教材とリモートで説明するということになってしまい、対面もここには入ってくるべきで、デジタルを加えたからこそデジタルだけ浮かんできている。施策の表現の問題だと思う。
- (1)の方は「デジタル活用」と記載していて(2)は「デジタル技術の活用」と書いている。11ページの(2)は「デジタルを活用した」と書いてある。同じような意味だが、3つの言葉が来ているのでここは言葉を精査した方が良いと思う。

[事務局]

- いわゆる SNS やホームページなど、今ある既存のアイテムを使って情報発信をしていくことを「デジタル活用」と表現し、ものづくりや建設分野の設計・施工管理等は「デジタル技術」と表現している。

[委員]

- 資料3-①の10ページ、ここで将来像を示し、その下に将来像の具体的な状態ということでイメージを書いている。
- 若者の流出分科会で若者4人がプレゼンテーションした中で、地域の方々と一緒になっていろいろな自分の地域の良さ等を話し合う中でその地域に対する愛着とか誇りがすごく感じられるようになったというとても重要な意見があった。若者に限らず、そこに住むすべての住民が愛着や誇りを持つ地域づくりというのがこの将来像のもとで状態として現れるというような文章を入れてはどうか。
- 脱炭素や地域循環共生圏、ローカルSDGsというキーワードも示されているが、将来像の状態のリストアップの中では弱いように感じる。

[事務局]

- 1つ目の地域に愛着を持ってもらうというところは将来像の状態として追加したい。
- 「豊かな自然と人々の暮らしが調和した生活圏の形成」と書いてはあるが、その表現ももう少し具

体的に考えたい。

[委員]

- ・ 最初に観光のところの捉え方についてである。観光地づくり、あるいは観光地に来て欲しいというロジックでインバウンドも含めて構想されているが、従来型の物見遊山のような観光とは違い、ライフスタイルとか農村の風景、空き家をうまく連携させながら、あたかも1つのホテルのようにマネジメントしていくような新しいスタイル、つまり観光地というよりもどちらかという目的地のようなつくり方によって変わってきているということ。合わせて移住定住もそういったところのファンづくりから段々と準居住、そして移住定住という流れが見られてきている。地域が好きになり、地元のイベントに参加し、最後に居住していく流れもあるので、その辺りも拾い上げるようなつくり込みが必要だと思う。
- ・ もう1点は国際物流に関し、内航フィーダーとってダイレクトに海外につながるのではなく、国内のいろいろな港を寄りながら荷物をまとめていって最後に東南アジアに出荷していく。そういった国際物流の動きもあり、北陸は日本海側の中間地点として重要な役割を担っている。そこをもう少し触れておくと良い。

[委員]

- ・ 委員がおっしゃったとおり内航フィーダーは重要である。この1、2年の間、日本海側の内航フィーダー航路として北陸にも寄港するものが開設されてきている。これまでプサン積み替えが基本だったがそうではない形もできてきている。内航フィーダーについて触れることは非常に良いことだと思う。

[事務局]

- ・ ご指摘のとおり内航フィーダーが充実しており、外航についても直結していることなどが「売り」になっているので、その記述について検討したい。

[委員]

- ・ 資料そのものについてはとてもよくできており、SWOT分析に基づいてどうあるべきかということが書かれているのは大変良いことだと思う。少しだけ気になるのはいろいろなところに「デジタルを活用して」と書いてあるが、あまり具体性のない形で「デジタルを活用して」という言葉が頻出しているような気がする。具体的に「デジタルのどういったことをどのように活用して」というようなことを書いておかないと便利な修飾語として使われているだけになってしまう気がする。どのように活用するかということと、活用するために必要となる準備はどのようなことがあるのかということが書かれていかないと具体的な施策につながっていかないのではないかと。デジタルだけではなく「暮らしやすさに磨きをかける」も非常に耳障りの良い言葉だが、どのようにして磨きをかけるのか。具体がないままにきれいな言葉が結構出ているので、これから直していったらどうだろうか。同じように「三大都市に近接しているメリット」というのは逆にデメリットにもなりうる。北陸圏に魅力がないと全部吸い取られてしまうので、より良くするために何を具体的にすればよいか。それぞれキャッチフレーズはカッコいいがそれを具体化するためのキーワードが1つずつ何か入れてあるとさらに良いものになるのではないかと感じた。

[座長]

- ・ 非常に鋭いご指摘でその通りだと思う。

- ・ 事務局いかがだろうか。この場でお答えできなければ「検討します」でも。

[委員]

- ・ 「検討します」でよい。注意しておこうというだけのコメントである。
- ・ 国の施策もよく似ているところがある。言葉はすごく良いのだが具体的にどうするかを書けていないところがある。これはこれからの課題で良いと思う。

[委員]

- ・ 2つ聞きたい。
- ・ 1つは資料3-①の11ページ、真ん中の下の方にコンパクトなまちづくりとある。確かにコンパクトなまちづくりは推奨されていて成果が出ているのは確かであるが、市内をコンパクトにしても周辺部に住んでいる人には恩恵が少ない。公共交通を発展させても周辺部の高齢化とか少子化に関してはあまり手当されていない。公共交通が使われなまま放置されているようなものも多く見られる。それに対してデジタルを活用した地域生活圏の形成はどのように効果を表すのかよく見えない。例えばデマンド交通みたいなものを作ろうとしたときには、コンパクトなまちづくりの部分にはほとんどデマンド交通は必要なく、皆が公共交通で移動できているからよいのではないかというようになる。実際は免許返納等で困っている交通弱者化している（周辺部の）高齢者の問題で、コンパクトな街づくりが結局、住みにくい田舎を作り出しているように感じている。コンパクトなまちづくりの対極側にあるような散逸した田舎に対して、「暮らし続けるためのサービスの提供」の手当というものが具体的に組み込まれると、「最後まで住んでもよい田舎」というような場所が作れると思う。
- ・ 2つ目に同じ資料の7ページ、で「デジタルの活用によるカーボンニュートラルの実現や資源の地域循環の取り組み、並びにエネルギーマネジメントの取り組みが重要である。」これはこのままの表現でどこに持って行っても何の問題もないが、デジタルを用いて具体的に何をどうするかという表現があるとよい。これに関連するのが同じ資料の12ページ、下の囲みで「豊かな自然、潜在的な水資源」、これにカーボンニュートラルを掛け合わせている。水資源と書いてあるので水力発電や小水力発電を暗に示しているかもしれない。確かに豊かではあるが、カーボンニュートラルという視点で見ると小水力発電のボリュームはそんなに大きくない。むしろどちらかというと福井県や石川県だと風力の方が大きかったりする。そういう意味でもう一つ踏み込んでどういう資源をどう活用するかをもう少し具体的に記載されていると、より施策としては良いと感じた。

[事務局]

- ・ それぞれもう少し具体的なイメージも含めてお示しするよということなので、いただいた意見を踏まえて考えたい。

[座長]

- ・ 施策のところにも踏み込んでいるので、もし将来像について、ご意見があるようであればそれを優先してお伺いしたいと思う。

[委員]

- ・ 資料13ページ、目標2の「競争力のある産業の育成」の(1)の農業についてのところだが、次期計画のところには「デジタル活用による圏域の食糧供給と地域ブランド力のさらなる強化」とあるが、今、国を挙げて「みどりの食料システム戦略」という持続可能な農業の推進を進めているので、ここ

にも「持続可能な食料システム」を構築していくとあると良い。

[委員]

- ・ 目標4というところで「交流人口の創出」という項目がある。地域内外との人材交流や世代間を超えた学びや働き掛け、観光に限らないワーケーションや二拠点居住のような交流みたいなものがあるところに出てきていてそれは農業にも工業にも防災にも関係する。目標4のところが「交流・関係人口の創出」となっているが今書かれている内容というのは、ほぼ前の広域計画の時と同じく観光を意識し、外から来る人というニュアンスに見えるような文章の書き方になっている。ここに世代間や地域内での学び合い、二地域居住、ワーケーションとか、就業支援で人が交流しやすくなるようなことを支援するというような、人と人が結びつくとか、地域と人と資源が結びつくということがもう少し見えるようにできるとよい。

[事務局]

- ・ 目標4の真ん中の欄、見直しのポイントの上の段に「豊かな自然、歴史文化等の観光資源」という強みに対して、デジタルによる情報発信、テレワークを掛け合わせて「観光客の増加、観光関連産業の需要拡大」と書いて、さらにその下に小さく「関係人口の拡大」と一言で書いている。ここが思いとしては二地域居住やUIJターンにより暮らす場所として選んでもらうなど、関係人口の拡大を図りたいという思いがあった。もう少し具体的に書いてみたい。学び合いや世代間交流というところも関係人口、交流関係人口の創出という中で、そういった切り口も考えてみたい。

[委員]

- ・ 資料3-①13ページの目標2の「競争力のある産業の育成」について、農林水産業やものづくり産業の活性化とある。若者の圏外流出の話の中でベンチャーの企業や今までの既存の産業以外のところをどうやって増やしていくかという話が出てきていた。ベンチャー企業の支援や起業等に対する支援も施策の一つとしてあると良い。
- ・ もう1つは資料3-①16ページのところで、デジタルの話が非常にたくさん出ている。先ほども話にあったが、具体的などころが何かというところを書いていただきたい。逆に目標4の交流・関係人口のところにはデジタルという言葉が何も出てこない。ここに対してもデジタルは重要な要素であり、観光関連についてもそういった言葉があると良いと思った。

[事務局]

- ・ 競争力のある産業の育成というところは確かに第一次産業・第二次産業をイメージして書いていたところがあるので、ベンチャー企業の観点も含めて検討したい。
- ・ また目標4の交流関係人口のところにデジタルのキーワードがない件について、上の四角のところでもデジタルによる情報発信、テレワークと書いてあるが、表現を検討したい。

[座長]

- ・ 先ほど「将来像に対してのご意見」と言っていたが、将来像だけでは議論ができないというのが皆さんの感覚かと思う。
- ・ 骨子案の将来像、目標、施策を含めて、全体を通して意見を頂戴できればと思う。

[委員]

- 全体的な骨子としてまとまっていると思う。1つだけ気になった点としては13ページ、「就きたい仕事がある」という単語についてである。私自身スタートアップ業界に十数年いて就きたい仕事を探しに行くのではなく自分の強みを活かして仕事をつくりたいという風に考えている。そういった女性の起業率もコロナを経て上がっている。働き方は自分で作っていくものという考えが時代の変化に適応していこうと思っている女性では多いと思っている。富山に「就きたい仕事がある」よりも、富山で「挑戦しやすい環境にある」という表現の方が流出しやすい女性、若い女性には響いていくのではないかと思った。そういった意味では9ページの「就きたい仕事がある」という単語よりは「挑戦しやすい仕事環境がある」の方が良いと思う。既存の仕事に若者に当てはまるだけでなく、時代に合わせて若者が仕事を作っていくというのが大事だと思うため、「挑戦しやすい仕事環境がある」という表現の方が良い。
- 13ページ、ものづくりや農林水産など北陸にある土壌を活かして産業を強化していくという北陸ならではの強みを活かすというところには賛成する。しかし、競争力強化というところは既存を強化するという表現にもとれるので「新規産業の育成」とか「新しく挑戦しやすい」という要素を入れていただくと思う。そういった意味でスタートアップエコシステムの構築と書いていると思うがスタートアップエコシステムというのはベンチャー企業である。「メルカリ」とか融資ではなく投資家から調達を受けて10年以上で上場するような。そういった表現にとれる。1人からでも小さく起業してしっかりと企業を育てていくというところをイメージしているのであれば「スタートアップエコシステムの構築」というのは表現としてミスマッチだと思う。
- もし「スタートアップエコシステムの構築」というところで個々の土台となる議論を私は把握していないので違う意図があれば、新しい産業を生みやすくするという意味で使われているのであればもう少し表現を変えた方が適切だと思う。

[座長]

- 私はこの分野に疎くてよくわからなかったのだが、何か良い表現の提案があれば教えていただきたい。「スタートアップエコシステム」という表現に変わる言葉はあるだろうか。

[委員]

- 「起業環境の育成」とか新しく起こしやすくすることだと思う。「スタートアップエコシステムの構築」はかっこいいのだが、「起業家育成」「起業環境の醸成」とかがフィットすると思う。

[座長]

- 事務局で少し検討いただければと思う。

[委員]

- 資料3-②の8ページ以降の骨子案に目を通して思ったこと、気づいたことを何点か指摘させていただきたい。
- 1つは、全体として北陸らしさがあまり感じられないと思った。「北陸らしさとは何か」というと、人それぞれ考え方があろうと思うが、私の個人的な意見としては2つ強調できる部分があると思っている。1つはコンパクトで串に刺さった団子みたいな構造になっていること。これは日本国内の他の広域圏とはかなり違う構造だと思う。もう1つは雪である。本日の冒頭の座長挨拶も雪の話から始まっ

た。雪は災害の基でもあるが、同時に恵みでもある。雪のメリットの部分を押し出していくようなことが全体を通してちりばめられていると良いと思った。

- ・ 2点目も、全体の構成に関わってくる。地域のブランド化、ブランディングを積極的に進めていくことも、全体を通してあって良い。現行の案だと農林水産物のところにブランド化の単語が入っているが、それは交流人口にしても、産業にしても、あるいは住みやすい地域づくりでも、4つの目標全てにブランド化が関わって良く、それぞれのところにそういった記載があってよいのではないか。
- ・ 個別のところに入っていくと、4つの目標の1つ目の「個性ある北陸圏の創生」というところに「多様な価値観・ライフスタイル」という言葉が入っているのだが、多様なという言葉がありきたりな表現だと思う。若者の流出分科会の中で聞いた中では、古い価値観にとられるのをやめるべきだというのが基本的な考え方、議論の方向だったと思う。よって、例えば「新しい価値観やライフスタイルを生み出しつつ、こういう暮らしができる」とか、「変化する価値観を積極的に取り込みながらこういう暮らしができる地域」のような表現の方がより今回の分科会の議論を踏まえた表現だと思う。
- ・ 次の目標2、産業に関するところで、海外からの回帰ということが書かれている。昨今の国際情勢を見ると、今もすごく変化しているが、今後もっと変化していく。そこで、もう少し踏み込んで「国際情勢や地域情勢の変化に対応していく企業を支援する体制づくり」など、その変化に対応していかなければならない企業を支援していくというような施策を取っていくことが重要だ。
- ・ 5点目に、新幹線の駅を核にしたビジネス空間とか賑わい空間を作っていくというようなことを打ち出してはどうだろうか。先ほど、どちらかというとも第一次産業や第二次産業が中心に見えるという話があったが、第三次産業を考えたときに新幹線駅を中心とした地域というのは産業集積の拠点になり得ると思うし、交流人口や若者にとって魅力的な空間をつくるという意味でも新幹線駅を核とした空間づくりをしていくというのが重要なのではないかと考えた。
- ・ 6点目に最後の交流人口・関係人口のところである。私もここを読んで「交流人口」の概念に引きずられたままであると思った。インバウンドとか外からの観光客に来てもらう施策が並んでいる。「関係人口」とは今回新しく出てきたキーワードで、人のつながりを幅広く捉えようということだと思うので、例えば施策として「国内外に北陸ファンを増やしていく施策」、必ずしも北陸に来るわけではないけれど北陸のファンになる人を増やしていくような施策や、北陸出身者や北陸にゆかりがある方との関係維持を図るような施策というのも、項目として上がってよいと考えた。
- ・ 最後に、「環日本海」という言葉が今あまり脚光を浴びるような状況ではないが、それでもそれは必要であるという一言が入れてあって、ありがたいと思った。

[座長]

- ・ 的確なご指摘と素晴らしい提案がちりばめられていたと思う。
- ・ 確かに北陸は大都市圏と比べればコンパクトな都市が横に長く連なっている。私は以前から連接都市圏という言い方をしていた。ぜひそのようなキーワードを入れていただけるとわかりやすいと思った。

[委員]

- ・ 3ページの「競争力ある産業の育成」というところに関わってくるが、20年ほど前に富山にいたころによく議論していたのはニッチ産業に強いということと中堅企業が多いということ。ニッチの強さというのは北陸の強みではないかと思っている。商品もここでしか作れないものがたくさんあるし、

技術もそうである。そういったニッチということ 키워ードで何か良い言葉がないか。例えば造語に近いが、「創造産業」、金沢市でも創造都市という言い方をしているので、創造の強さというのが北陸の強みなのでどこかでこういった言葉を入れて商品のニッチにかける。これは理由があつて多様な植生や海の深さや高低差から北陸の人達の知恵がニッチを生み出して、それが他地域との差別化につながっていると思う。ニッチでも良いし、創造でも良いのもっと北陸の強みみたいなものにストレッチをかけても良いと思う。

[座長]

- どんどん良いキーワードが出てくる。皆さんから良いアイデアが出てくると事務局は心の中で喜んでいてのではないかなと思う。

[委員]

- 防災に関して、資料 3-①の目標 1 の (1) と資料の 3-②の 13 ページになるが、新しい施策では自主防災組織の維持など「減災に資する地域コミュニティを活かした体制の構築」と示している。ハード面だけでなくソフトの面で助け合いながら地域を強くしていこうという主旨がこのように示されたこと自体はとても良いことだと思っている。一方で、最初に北陸の強み弱みを書いているところでは地域の人口減少、高齢化、少子化というものが著しく進んでいて、地域の担い手が十分に確保しづらい状態や、地域活動をしていくのが厳しくなっているところもある。地域コミュニティを活用した体制の構築、地域コミュニティ、自主防災組織の維持ということだけではカバーしきれないのではないか。例えば、地域の学生と協定を結んで除雪のボランティアを依頼するなど、コミュニティとは少し違った新しい形で人と人との関りをつくることでお互いに助け合えるという事例も北陸の中でもあると思う。そういったものも新しく取り込みながらやっていくとか、住民まかせでは厳しい部分をどうすればよいのか考えていくことも必要であるというニュアンスも入れるとよい。SWOT 分析で弱みとしているにもかかわらず矛盾するような施策はどうかと心配になった。

[座長]

- 表現を事務局で考えていただきたい。

[委員（事務局代読）]

- 委員からお預かりしている意見を読み上げる。
- 1. 地域経営の視点で SWOT 分析を導入したことは大変に有意義。その際、特に機会や脅威について世界社会の期待や要求、プロトコール、約束事が大きく変化していることを鋭敏に織り込むことで価値が高くなる。例えば、地球環境の領域ではサステナブル（持続可能）からレストアブル（回復可能）、さらにリジェネラティブ（再生）へと世界の議論の先端は変化してきている。また企業は地球環境への優しさ、ネットゼロカーボン、自然資源の保護、ダイバーシティ、人権、エクイティ（公正さ）等の面で、大きなプレッシャーを受けるようになってきている。プレッシャーに対する解を提供できれば地域に呼び込める。北陸圏域においては、そうした環境変化を強みへと転換できるポテンシャルが多くあるのではないかな。
- 2. 北陸圏のように生活環境が豊かな地域において、域内の若者人口を左右するのは、域内に付加価値の高い専門的な仕事をどれだけ作り出せるかにかかっている。そうした仕事を地域に呼び込むうえ

で、デジタルに関する専門的学習を徹底して進めることがかなり重要。AI・データサイエンスやVR（仮想現実）、AR（拡張現実）、通信等といったデジタル分野では学びの場はデジタル空間でよく、学びには場所を選ばない。地域内で学習意欲を高め、学習環境を整えることが必要となる。

- 3. 一方でリアルな接触が重要な知識分野も存在する。例えばAIを除くディープテック（環境、エネルギー、材料、ロボットなど）の習得には、対面での機会が欠かせない。また、先に挙げたような世界の変化の潮流の最先端についても、それに関する信頼できる情報を得るためには対面の機会が重要。北陸圏域には特色を持つ大学が多数立地しており、圏域内の大学を知識拠点と捉え、起業支援も含めて、従来よりも多様な形で活用していくべき（「新しい学習地域論」）。以上。

[座長]

- 的確なご指摘もずいぶんあると思った。
- 大学人の一人とすれば3番目の北陸にある大学が拠点になって地域に貢献するというのは良いことだと思うし、そうあるべきだし、我々も頑張らないといけないと思う。特によく言われるデジタル人材育成は実際にどうするのかというのはなかなか難しい。

[委員]

- キーワードの一つとしてリスキリングがある。AIやデジタルだけでなく、少し年配の方も学びを深めたい、自分が今まで学べなかったことを学びたいというニーズは少なからずある。何か1つのスキルを増やしていく、学びの機会をいろいろな世代に提供していくことがUIJターンの推進にもなると思う。北陸のいろいろな教育機関が連携して何か取り組んでいけるとよいと思う。
- 今、日本では風力発電は造れない。秋田や山形で風力発電を造るとしているが、あれは全部輸入である。昔は日本で作っていたが、企業が儲からないとして止めている。いろいろなニッチな企業が北陸にもあるが、時代の流れに応じて利益が上がらないということが出てくる。そういったニッチな企業の力をまた違ったところに展開していくことを北陸の皆さんで考えてあげることも一つの大きな流れになると思うので、ぜひそのような仕掛けが欲しい。
- 北陸には一次産業、二次産業がしっかりとあるので、六次産業化の推進というのはもっとできる可能性があるのではないかと考えている。
- エネルギーの関係では、雪を何かに使えないか、北陸は積雪が多いので資源として何かに使えるよう後押しできる仕組みがあれば良いと思う。
- 関係人口については、地域でどのようなイベントがあるかということが「関わりたい人」にうまく伝わらない。ホームページで「関係人口」のポータルサイトなどあるが、そこまで見にいかななくても「関わりたいという人」に情報がしっかり伝わるような仕組み、北陸のイベントが三大都市圏でつながるといった仕組みづくりがあると、もう少し都会の人でも北陸に来るだろうし、地元の大学生たちも関わってくれて、中には将来北陸に住もうということも出てくると思う。情報をいかにうまく伝えるか仕組みを考えると良い。

[委員]

- 先ほど話があったが、地域力という観点から防災のところと同じ考えを持っていた。ぜひ「地域力を高める」とか「レジリエンス」というキーワードを用いて地域が共同体としてどのように力を上げていくか、その前提として人口減少による脆弱化が進んでいるということをもっと表現した方が良いと思う。限られた人口の中でどのように地域力・レジリエンスを強めていけばよいのかということ

が一番肝心である。

- ・ 分科会の時も資料を提供したが、若者の地域参画は若者だけではなく地域のいろいろな方々が自分たちの地域に対して積極的、主体的に関わっていくという機運を作っていく必要がある、そのためにはシティズンシップ教育が大変重要だと思っている。資料 3-②の 1 ページで北陸圏の課題として「若者が地域のことを知らない」「若者に限らず地域の良さや愛着や誇りにつながるような地域資源、すばらしさについて知らない」「課題についても知らない」そういったものについて対話を通して学習・啓発を進めていくということを書き込んでもらえるとよい。それによって地域の誇りや愛着、そして関わっていこうとする主体性と力が育ってくると思う。シティズンシップ教育に限らず防災教育、脱炭素地域づくり、気候変動教育といったものが推進されているので、積極的に書き込んではどうか。
- ・ 第 3 章の将来像のところ、男女共同参画の問題をキーワードとして、ジェンダー平等や寛容さ、幸福実感といったものが今までの議論にあったが、いつのまにか消えているのでそれをぜひ残して欲しい。特に女性の働きやすさは就労問題だけではないため、もっと地域に深く根差したものを根幹から変えていくような、先ほど話のあった「新しい価値観を積極的に受け入れたり、創り上げたり」といった切り口を示していくことが重要であると思われる。

[事務局]

- ・ そのように検討して参りたい

[座長]

- ・ では、私の方で本日の意見を最後に簡単に整理したいと思う。
- ・ まず 2 つの分科会で、とりまとめとそれに基づく提言をいただいた。内容は非常に濃いものがあつた。特に若者の分科会については学生 4 人から生の声を聞いた。私も拝聴していて最近の学生はこんなことを考えているのだと感心させられた。そういった意味ではいただいた意見が随分分科会の中に取り入れられたのではないかと思う。
- ・ いろいろ意見があつたが、囲い込むのではなく一度外の社会や世界を見たらうえで地元の北陸の良さを再認識してもらい、そうすれば他で学んでも帰ってくる芽になる。そのためには地元の北陸の良さを北陸から出る前に知ってもらうことが大事である。そういった意味では先ほど委員が言われたようなシティズンシップ教育が大事なのではないかと思う。今は総合学習という地域の課題を自分たちで考えて学習し、地域の良さを知るという授業がある。いろいろ聞いていると総合学習は小学校の先生にとって手間が多くてもものすごく大変であるという。それを地域の企業や行政、PTA 等がうまく支援できるような仕組みを創り上げていけば先生の負担も少なくなり、それこそ総合的な授業になるのではないだろうか。そういったことがうまく進むような教育システムを作り上げていくことが大事である。最近、大学でもアクティブラーニングを授業の中にとり入れることが求められており、大学はずいぶん進んでいる。もともと、大学の単位というのは一単位を認定するために 45 時間勉強することが求められている。予習に 15 時間、授業で 15 時間、復習で 15 時間、それで一単位認定されることになっているが、なかなかそれがうまくいっていない。それを解決するためにアクティブラーニングをするように日本の大学教育も変わってきている。やはり小学校の時からこのように進めていくと良くなるのではないかと思った。
- ・ また、国際物流や観光の話もあつた。
- ・ 何より提案した SWOT 分析により施策や戦略を考えるうえで明快に根拠が示せることになった。弱み

と機会をかけ合わせたり、強みと脅威をかけ合わせるようなやり方で施策をくみ上げていくようにしたおかげで非常にわかりやすくなったのではないかと思う。もちろん各委員から指摘があったように記載に足りない部分があったり、ニュアンスが違うということはあるが、それらも整理をするという意味で効果的な一つの方法だと思う。

- ・ 北陸の強みを活かすために関係人口を増やすということがいろいろなところに出てくる。輪島の千枚田でオーナー制度の募集人員に対し、応募者が多くて抽選になったという話をテレビで聞いた。あそこは象徴的なところだが、農業だけでなく漁業も林業も若者や担い手不足で、どんどん高齢化が進んで耕作放棄地が増える。それが太陽光パネルに代わっていたり、そのまま荒れっぱなしになっていたりする。機械化が進まないところは人間の手でやらなければならない現状がある。それを解決する方法が先ほどの「いろいろな人の手を借りる」ということではないか。輪島の千枚田だけではなく、いろいろなところにそういった地域があるので、行政が支援しなければならないと思うが、北陸として他地域から手助けしたり、支援できるような仕組みを作っていくというのも一つの方法だと思う。
- ・ 本日いろいろなご意見をいただいたが、事務局は「目から鱗」という部分もあったのではないだろうか。ぜひ本日いただいた意見を整理して次回の第4回で骨子案としての確認をいただければと思う。

[委員]

- ・ 先ほどデジタルに関して意見があったが、私の個人的な意見としては今の段階では具体的なデジタル技術とかはあまり明確にしなくて、「デジタル活用」、「デジタル技術の活用」で止めておいてよいのではないかと考えている。もっと深いところや細かいところで書くところがあれば書くのは良いと思う。なぜかというデジタル技術は日進月歩なので、今たとえ具体的な方向を書いたとしても数年後には陳腐化しているということがあり得る。よって、キーワード的な言葉でよいのではないかとと思う。

[委員]

- ・ 今、高校生が探求学習として、いろいろな高校で取り組みが進んでいる。地域に出て行って課題解決型のまちづくりをしようと地域のいろいろな主体、大人たちと高校生がまちづくりを学んでいくということが各地で広がっている。その中で福井県坂井市でもまちづくりカレッジを通して高校生が大人と一緒に学んでいるが、彼らは本当に変わっていく。そして自分たちの地域の問題、今まで知らなかった課題を実感して自分の意見をまとめ発表できるように力をつけている。今はとてもチャンスが多い時代になってきていると思うし、高校生でこのような学習をして意識が変われば、仮に彼らが首都圏の大学に進学したとしても自分のふるさつを見る目や意識は変わってくるのではないかと思う。今とても大事なターニングポイントにあることを申し添えたい。

4. その他

- ・ 委員に諮った結果、本日の懇談会資料は公開する。
- ・ 委員に諮った結果、議事録は内容確認後、公開する。

5. 閉会

[北陸信越運輸局長]

- 本日は大変お足元の悪い中、この会議に参加いただき感謝申し上げます。また、大変お忙しい中、オンラインでご参加いただいた委員の方々にも心から感謝申し上げます。
- 本日の議論を聞かせていただいて、コロナの影響で世の中が変わってきたということもあり、様々な論点、視点でご指摘いただいたと認識している。事務局としても、本日いただいたコメントをしっかりと受け止めて、どういったかたちでこの骨子に反映させていくか検討させていただき、改めてお示しする骨子案について議論をいただきたいと思っている。
- 本日の議論を通して、私自身が感じたことは、やはり「人」ということ。先ほどの交流人口の話や若者の圏外流出ということを見ると、いかに地域に根付いてもらうのかということが大事で、そのためには地域の活性化、すなわち地域に住んでおられる方が英気を持ってやりがい、いきがい、働きがいを持ってここに生活をしていくということだろうと考えている。
- 私たちが担当させていただいている観光に関して、観光の専門家の中に「今だけ、ここだけ、あなただけ」と言われる方がいらっしゃる。すなわち、この観光地に来るのは、今しか見られないもの、ここでしか見られないもの、観光者の方々だけが特別に受けられるサービスがある。こういったものが揃うと持続可能な形で地域の観光が発展できるということをよく言われる。この北陸地域においてまさに「今だけ、ここだけ、あなただけ」、北陸地域ならではの強みは何なのか、それに対してどのようなアウトプットをこの先示していくのかをこの計画の中で示していくことが大事だと思っている。
- 本日いただいたコメントをしっかりと踏まえて、地域の発展のための有意義な計画を作って参りたいと思う。引き続きご協力をお願い申し上げます。

－ 以 上 －